

## 本書のコンセプト

数年前のことです。ある年輩の女性から、こんな話をうかがいました。その方が知人に、自分はジェンダーについて勉強していると言ったところ、「まだそんな古いことを言ってるの、ジェンダーなんてもう死語だよ」と嘲笑されたというのです。

私が本書を書くことにしたのは、何よりも、そうした浅はかな考えでジェンダー論を退ける世間の風潮に抵抗したいと考えたからです。

「ジェンダー」という言葉は、今日では主に人文社会科学の領域における一種の学術用語として定着しています。けれどもその歴史は、女性や性的マイノリティによる解放運動と切っても切り離せません。「ジェンダー論」や「ジェンダー学」と呼ばれている知的探究は、女性に対するさまざまな差別・抑圧・暴力に抵抗する19世紀以来のフェミニズム運動とともに成長してきたのです。20世紀後半からは、さらに同性愛者やトランスジェンダーの人々による反差別運動とも連携し、同時に緊張関係をも保ちながら、現在もおその視野を広げ、かつ深めつつあります。

そのような学問が古びて役割を終えたとしたら、それは闘いの相手である差別・抑圧・暴力が消え去ったときでしょう。それでは、いま現実の社会を見まわしたとき、本当にジェンダー論はその役目を終えたと言えるのでしょうか。それはもう「死語」として片づけるべきものになったのでしょうか。

決してそうは言えないと——残念ながら——私は思います。私たちがともに暮らしているこの現実の世界には、いまだに不当な性差別や性暴力がはびこっていて、人々の生を息苦しいものになっています。ジェンダー論が取り組むべき問題はまだまだたくさん残っているのです。

それでは、具体的にはどのような問題があるのでしょうか。それらを解決するためには、どのような視点が必要なのでしょうか。本書は、こうした問いへの答えを、知的好奇心にあふれた読者のみなさんといっしょに探っていこうと

する試みです。

## ジェンダーという概念

本文に入る前に、「ジェンダー」という耳慣れない言葉の基本的な意味を説明しておきましょう。本書では、ジェンダーという概念を次のように定義することから出発します。

私たちは、さまざまな実践を通して、人間を女か男か（または、そのどちらでもないか）に〈分類〉している。ジェンダーとは、そうした〈分類〉する実践を支える社会的なルール（規範）のことである。

これだけではまだ何のことかよくわからないと思いますので、この定義の核をなす「〈分類〉する実践」という概念についてももう少し説明しておきましょう。このようなジェンダーの概念を設定することで具体的に何が見えてくるのかについては本文にまかせることにします。いましばらく我慢しておつきあいください。

〈分類〉と言うと、動物を種ごとに分類して図鑑をつくる、といった活動——本書ではこうした人間的な諸活動に「実践」という言葉を充てます——が思い浮かぶかもしれませんが。もちろんそれも「〈分類〉する実践」ではあるのですが、ここでのポイントは、〈分類〉とは頭の中で対象を並べるだけの作業ではないということです。私たちが対象を〈分類〉する仕方は、その対象に対する感情や関わり方とも密接に結びついています。ごく身近なふるまいについて思い浮かべてみてください。たとえば、あなたは同性の友人を飲みに誘うことは気軽にできるのに、異性の友人に対してはそうはできない、といったことはありませんか（「全然そんなことないよ」という人は別の例を探してみてください）。もしそうであるならば、そのときあなたは他人をその性別によって〈分類〉しているのです。

これは決してあなたという特定の人だけのふるまいではありません。友人としてつきあうかどうか、恋人にしたいかどうか、社員として雇うかどうか、教科書に偉人として取り上げるかどうか……こうしたさまざまな選択に際して、

しばしば私たちは相手の性別、すなわち相手が女であるか男であるかを判断材料にしています。性別は、私たち一人ひとりの生活や人間関係や社会的地位に、要するに私たちの人生に、多大な影響を与える要因なのです。本書で言う〈分類〉とは、このような影響のすべてを包含する概念であると理解してください。

このような定義は、ジェンダーという概念の一般的な説明とはずいぶん違ったものに見えますので、これまですでに「ジェンダー」という言葉をタイトルに掲げた本を読んだことがある方は、ちょっと戸惑われたかもしれません。一般的には、「ジェンダー」は「社会的性差」と訳され、「生物学的性差」を意味する「セックス」の対義語として、生育環境によって生じる性差（集団としての男女の違い）を表すとされることが多いでしょう。しかし実際にはそうした用法だけでなく、男らしさや女らしさのイメージや、男はこうあるべき・女はこうあるべきという性別役割を意味したり、さらには最近では、単に性別を指すのに「ジェンダー」という言葉が使われることも増えてきました。これらは、よく考えてみるとそれぞれ少しずつ違う意味なのに、それにもかかわらず漠然とすべてをジェンダーと呼ぶのでは、初心者（だけでなく、実は専門家も）は混乱してしまいます。

そこで本書では、これらさまざまな用法を枝葉と見て、それらを派生させる樹の幹、あるいは根っこの部分をずばり指し示す定義を採用することにしたのです。たとえば、男の方が女より平均的な筋肉量が多いという科学的認識も、男は理性的で女は感情的といった単なる偏見も、男は家族を経済的に支えるべきもので女は家事・育児を引き受けるべきものといった性役割の観念も、いずれも人間を男と女に〈分類〉する実践のバリエーションです。このポイントさえ理解すれば、性別に関係するさまざまな種類の現象たちの間のつながりを、よりすっきりと見通せるようになるでしょう（ただし、「ジェンダー」の多種多様な用法がある程度定着してしまっている以上、本書でもそれらに従わざるをえない場合があることは、あらかじめお断りしておきます）。

## 本書の特徴

人間を男と女に〈分類〉する実践に着目するということは、すなわち性別という現象そのものを一つの謎としてとらえるということです。「人間には男と

女がいる」ということを自明の前提として置くのではなく、逆に考え方次第で簡単にないことにできるようなものとして扱うのでもなく、「人間には男と女がいる」という現実を、私たちはどのようにしてつくりあげているのかを問い続けるといことです。数多くのジェンダー論の本が出版されている中で、本書の内容上の特色は、まさにこのような問いの構えを貫いている点にあるでしょう。

内容の難易度という点について言えば、本書はまったくの入門的テキストとして書かれました。入門書であるとは、本書を読みこなすために、ジェンダーをめぐる学問的言説についての予備知識は必要ないという意味です。専門用語をいきなり十分な説明抜きに使うといったことはできる限り避けるよう意識しました。論理的にものを考える力とある程度の常識的知識、そして何よりもジェンダーをめぐるさまざまな問題について知りたいという関心さえあれば、本書を読み通すことができるはずです。もちろん書物とは無限の読者に開かれたメディアですから、著者としては本書がすでにジェンダー論を深く学んできた方をも唸らせる充実した内容であることを望みますが、しかし本書は誰よりも、はじめて本気でジェンダー論を学ぼうとしている人たちのための本にほかなりません。

ただしそれは、内容のレベルが低いということではありません（と信じています）。大学の教科書ないし参考書として利用されることを想定したシリーズの一冊として、紙幅や構成に制約がある中で、高度な内容とわかりやすさを両立させるために、本書では思い切って「広さ」や「バランス」といった側面を断念し、むしろ「深さ」や「緻密さ」を重視することにしました。したがって、本書で扱われるトピックの範囲は偏っていますが、その代わり、取り上げたトピックについてはかなりくわしく解説しています。また、理論的な内容を解説する場合でも、なるべく具体的な事象に即した論述となるよう心がけました。

したがって、本書は、何かわからないことや知らないことがあったときに開いて調べるための本ではありません。装丁も含め、本書の佇まいはいかにも教科書風ですが、むしろふつうの単行本や新書本と同じように、頭から尻尾まで通して読むための本として書かれています。そのような本として、本書を授業内で教科書として使うだけでなく、参考書や副読本として利用していただくこ

とや、もちろん大学生以外のさまざまな年齢や職業の方々にも読んでいただけることも期待しています。

以上のような執筆・編集方針から、本書では体裁についても読みやすさを重視し、学術書や学術論文のような注は付けないことにしました。当初は文献引用もいっさい行なわないつもりでしたが、これはさすがに無理でした。数カ所で他の文献から直接引用した場合には、その出典を示す文献注を本文中に織り込んであります。それ以外は、他の文献を参考にした場合（間接引用）でも注は付けず、章末の「読書案内」の中で出典を示しています。これは通常の学術論文とは違うやり方ですので、学生のみなさんがレポートや卒業論文を書く際には決して真似しないよう、ご注意ください。

本書をみなさんが読み、その内容に刺激されて考え、また他の読者と議論し、さらには日々の生活に活かしていく——本書が、読者のみなさんのそんな「実践」をささやかでもサポートできるなら、著者としてこれほど嬉しいことはありません。

なお本書の執筆にあたっては、有斐閣書籍編集部の松井智恵子さんに大変お世話になりました。心より感謝いたします。

2017 年 3 月

加藤 秀一

# 目次

|            |   |
|------------|---|
| はじめに ..... | i |
|------------|---|

## CHAPTER 1

### ジェンダーとの遭遇 1

私たちは〈分類〉する

- |   |                              |   |
|---|------------------------------|---|
| 1 | さまざまなジェンダー現象 .....           | 2 |
| 2 | 私たちは〈分類〉する——「ジェンダー」の定義 ..... | 7 |

## CHAPTER 2

### 「女」「男」とは誰のことか 15

性分化とインターセックス

- |   |                     |    |
|---|---------------------|----|
| 1 | 妊娠・出産する男性? .....    | 16 |
| 2 | マイノリティとマジョリティ ..... | 17 |
| 3 | 性分化とインターセックス .....  | 19 |
| 4 | 二元的性別という「現実」 .....  | 22 |
| 5 | 「性別の基準」をめぐる考察 ..... | 23 |
| 6 | アイデンティティと権力 .....   | 26 |

## CHAPTER 3

### 性別という壁を乗り越える人々 31

トランスジェンダー

- |   |                        |    |
|---|------------------------|----|
| 1 | トランスジェンダーとは .....      | 32 |
| 2 | 日本社会の中のトランスジェンダー ..... | 37 |

## CHAPTER 4

### ジェンダーは性と愛をも枠づける 45

同性愛と異性愛

- |   |                              |    |
|---|------------------------------|----|
| 1 | セクシュアリティ、アイデンティティ、権力関係 ..... | 46 |
|---|------------------------------|----|

|   |                  |    |
|---|------------------|----|
| ② | 性自認と性的指向         | 48 |
| ③ | 同性愛という〈カテゴリー〉の発明 | 50 |
| ④ | 日本社会における同性間性愛    | 52 |
| ⑤ | 差別への抵抗           | 54 |
| ⑥ | クィアから未来へ         | 57 |

## CHAPTER 5

### 「男なんだから、男らしくすべき」は論理じゃない 61

性差と性役割

|   |                        |    |
|---|------------------------|----|
| ① | 男と女は別の惑星からやってきた？       | 62 |
| ② | 性差の語られ方                | 64 |
| ③ | 性差とは集団間の違いである          | 67 |
| ④ | 集団間の違いは個人間の違いとイコールではない | 69 |
| ⑤ | 性役割——規範性と社会性           | 70 |
| ⑥ | 性差と性役割——事実と規範          | 72 |

## CHAPTER 6

### 科学や数学は女には向いていない？ 77

生物学的性差

|   |                             |    |
|---|-----------------------------|----|
| ① | 女性の科学者が少ないのは、女性には不向きな職業だから？ | 78 |
| ② | 性差の生物学的要因                   | 79 |
| ③ | 進化                          | 85 |
| ④ | 生物学におけるジェンダー的偏見             | 88 |
| ⑤ | 生物学的性差の語られ方                 | 90 |

## CHAPTER 7

### ジェンダーの彼方の国はどこにある 95

メディアと教育

|   |       |    |
|---|-------|----|
| ① | 女道と男道 | 96 |
|---|-------|----|

|   |                        |     |
|---|------------------------|-----|
| 2 | 「女の子の国」と「男の子の国」        | 97  |
| 3 | ピンクカラーと女性役割            | 99  |
| 4 | 女らしい進路，男らしい進路？         | 103 |
| 5 | 学校文化と隠れたカリキュラム         | 107 |
| 6 | メディアとジェンダー——スポーツを通して観る | 110 |

## CHAPTER 8

### 男が少女マンガを読むのは恥ずかしい？ 115

恋愛と性行動

|   |                          |     |
|---|--------------------------|-----|
| 1 | 少女マンガ／少年マンガという〈分類〉の不可思議  | 116 |
| 2 | 「青少年性行動」調査から見る変遷         | 118 |
| 3 | 「草食系男子」は実在するか            | 124 |
| 4 | 性教育バッシング——〈一人ひとりの性〉を奪う政治 | 126 |

## CHAPTER 9

### 〈被害者〉の視点と〈加害者〉の視点 133

性暴力（1）

|   |                             |     |
|---|-----------------------------|-----|
| 1 | 性暴力の〈意味〉                    | 134 |
| 2 | 暴力をどう定義すべきか——〈誰の視点〉から見るかが重要 | 135 |
| 3 | 性暴力の概念をめぐる誤解・曲解             | 137 |
| 4 | 文化の違い？                      | 139 |
| 5 | ジェンダー・バイアスと強姦神話             | 141 |

## CHAPTER 10

### 「わいせつ」と「レイプ」は同じ罪なのか 147

性暴力（2）

|   |               |     |
|---|---------------|-----|
| 1 | 性暴力の〈分類〉に着目する | 148 |
| 2 | 強姦罪とわいせつ罪     | 149 |
| 3 | セクシュアル・ハラスメント | 153 |



|   |              |     |
|---|--------------|-----|
| 4 | 二次被害と性暴力の再生産 | 156 |
| 5 | 男性の被害        | 158 |
| 6 | 終わりに         | 160 |

## CHAPTER 1

# 1

### 「女性差別は終わった」という残念な妄想 163

性別職務分離と統計的差別

|   |                                       |     |
|---|---------------------------------------|-----|
| 1 | 女性優遇は男性差別？——女性専用車両とレディースデイ            | 164 |
| 2 | 男女間の賃金格差の現状                           | 169 |
| 3 | 男女経済格差をもたらす企業側の要因 1<br>——性別職務分離と男女特性論 | 173 |
| 4 | 男女経済格差をもたらす企業側の要因 2——統計的差別            | 176 |

## CHAPTER 2

# 2

### ワーク・ライフ・バランスを阻むものは何か 181

性別役割分業、ホモソーシャル、マタニティ・ハラスメント

|   |                                             |     |
|---|---------------------------------------------|-----|
| 1 | 男女賃金格差をもたらす労働者側の要因——性別役割分業                  | 182 |
| 2 | 職場における女性の身体<br>——セクシュアル・ハラスメントとマタニティ・ハラスメント | 187 |
| 3 | 「少子化」問題とワーク・ライフ・バランス                        | 193 |

## CHAPTER 3

# 3

### 女は子どもを産んで一人前？ 199

母性愛神話、リプロダクティブ・ヘルス&ライツ、生殖テクノロジー

|   |                              |     |
|---|------------------------------|-----|
| 1 | 「母性」という幻想                    | 200 |
| 2 | リプロダクティブ・ヘルス&ライツ             | 204 |
| 3 | わたしの <sup>からだ</sup> 身体、わたし自身 | 206 |
| 4 | 生殖テクノロジーが照らし出すもの             | 212 |
| 5 | 最後に——「人類としての義務」？             | 216 |

|      |     |
|------|-----|
| 事項索引 | 221 |
| 人名索引 | 227 |

章扉イラスト：オカダケイコ

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用でも著作権法違反です。

## 「女」「男」とは誰のことか

性分化とインターセックス

WHITEBOARD



**Thomas  
Beatie**

American  
who became  
the world's  
first pregnant  
man

トランス男性（FtM トランスジェンダー） 性的マイノリティ（セクシュアル・マイノリティ） LGBT 性分化 性染色体 インターセックス 性別二元制 性別の自己決定権 性自認（ジェンダー・アイデンティティ） アイデンティティ

## 1 妊娠・出産する男性？

トーマス・ビーティ（Thomas Beatie）さんという名前を聞いたことはありませんか。知っている人は知っているはずですが（あたりまえ）、一般的にはそれほど有名ではないかもしれません。もしご存じない方は、ネットに上の名前を打ち込んで検索してみてください。そのとき、まず画像をチェックしてほしいのです。オシャレな感じに髭を生やした上半身裸の男性が、妊婦のように膨らんだお腹に手のひらを当てている写真が見つかるはずです。

妊婦のように太ってしまった男性？——そうではありません。かれは実際に妊娠しているのです。ギネスブックにも「世界で最初に妊娠した男性」として載っているというこのビーティさんは、しかし、ハワイのホノルルで生まれたときから20代前半までは女性として育ち、名前もトレイシーという女性的なものでした。その後、ホルモン療法や乳房切除手術などを受けて男性へと性別変更した「トランス男性」（または「FtM トランスジェンダー」）なのです（トランスジェンダーについては、次章で詳しく説明します）。

そういうわけで、これは生まれつきの男性が妊娠した、という話ではありません。マンガの世界では「妊娠する男子」が増殖中ですし（たとえば、庄司創『白馬のお嫁さん』）、将来的には男性も妊娠できる技術が開発されるかもしれませんが、現時点ではまだ不可能です。ビーティさんのケースでは、もともと女性の肉体をもっていたので妊娠・出産できたのです。

そうだとしたら、何も驚くことはなさそう……ですが、やっぱり変だと感じる人もいるかもしれません。性別を変更して女から男になったというけれど、

妊娠や出産ができるなら、その人はやっぱり女なのではないか。肉体が女のまなのだから、性別を変更したことにならないのではないかと。

結局、ビーティさんは女性なのでしょうか、それとも男性なのでしょうか。

いまここで慌ててこの問題に答えることは控えておきましょう。こうした議論に決着をつける、少なくとも決着に至る見通しをひらくには、そもそも「性別」とは何かという定義と、誰が女で誰が男か（あるいはどちらとも言えないか）を分ける基準をはっきりさせておくことが必要だからです。それでは何を調べればその答えがわかるのでしょうか。——本章と次章でこの問題に取り組んでいきたいと思います。

## ② マイノリティとマジョリティ

性に関連して、普通とされる男女のあり方から何らかの点で逸脱したとみなされる人々は「性的マイノリティ」（セクシュアル・マイノリティ）と呼ばれています。短縮形で「セクマイ」と言う当事者も多いようです。なお「マイノリティ」とは、社会的に差別されている少数者集団という意味ですが、単純に数が少ないとも限らず、適切な日本語訳が見当たらないため、本書では「マイノリティ」というカタカナ語のままにしておきます。

性的マイノリティと似たような意味で使われる表現に「LGBT」——レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーという4つの英単語の頭文字を並べたもの——があります。国連のウェブサイトには、世界中でLGBTの人々が差別を受けていること、そうした現状を改善するために国連の人権機構がさまざまな活動を行なっていることが説明されています。このように「LGBT」という記号は、具体的にどういう人々を指すかが「性的マイノリティ」よりも明瞭なためか、公共的な反差別アピールなどによく登場する印象があります。最近では、インターセックスを含めた「LGBTI」という表記や、どんなカテゴリーにも当てはまらない人々を表す「クィア」（「変態」という意味のQueerという言葉当事者たちがあえて使っています）を入れた「LGBTIQ」という表記も広がりつつあります（なお、QはQuestioningの略号とされる

こともあります)。

さて、性的マイノリティとは「普通ではない」ことだと言うけれど、そもそも「普通」とはどういう状態を指すのでしょうか。これこそが本章の、というよりも本書全体を貫く最大のテーマです。単に、性的マイノリティとはどういう人たちを指すのかを知るだけではなく(それはもちろん大切なのですが)、そのことと並んで、「そもそも普通の女とか男とかとは何なのか」「なぜそれが普通だとされているのか」を深く理解することこそがジェンダー論の目標なのです。

それでは私たちは、どういう基準で、普通の男女と普通ではない男女とを区別しているのでしょうか。この問いは結局、私たちがそもそも男と女をどのように分類しているのかという問いに帰着します。性別とは、人間を「普通の女」と「普通の男」に分類し、そしてそのどちらにも当てはまらない人々を例外として切り捨てることにほかなりません。そこで、私たちが取り組むべき根本的な問題は次のようになるでしょう。私たちは、何を基準として、人間を女と男に分類しているのか。短く言うならば、性別の基準(あるいは理由)とは何か。

多くの人が素朴に信じている答えは、こんな感じではないでしょうか。——人間は生まれつき肉体のつくりによって「男」か「女」かが決まっている。それが性別ということである。……説明終わり。酷い人になると、「こんな明白な事実がわからないなんて、ジェンダー論なんかやっている連中は頭がおかしいんじゃないか」などと文句をつけはじめたりします。もちろんジェンダー論はそんなことでうろたえたりしません。私たちは、性別と呼ばれる現象に関わるすべてを、根本から考えようとしているのです。その考察対象には、上記のようなありがちな答えでわかった気になっている人たちが本当のところ何を言っているのか、という問題も含まれています。

さて、性別は肉体で決まっているというのは本当でしょうか。たぶん読者の多くが薄々気づいておられるように、これは修辞疑問です。つまり、「いや、本当ではない」というのがその答えです。それは好みや思想の問題などではありません。私たちの現実における性別という現象がどのようにして成り立っているかを事実在即して丁寧に考えるなら、そのように言うしかないのです。それはいったい、どういうことでしょうか。

この問いに答えるために、以下ではまず、肉体における性別（とされているもの）について最小限の事実を確認していくのと同時に、そのことと密接に結びついた性的マイノリティの形態である「インターセックス」についても学んでいきたいと思います。

## 3 性分化とインターセックス

### 性分化とは

肉体上の性別とひとくちに言っても、どのような基準で男女を区別すべきかがさっそく問題になるでしょう。受精卵から胎児期にかけてメス型とオス型の肉体が分かれてくることを医学や生物学では「性分化」(Sex Development)と呼びますが、「性=性別」の定義=基準がはっきりしなければ、何がどうなれば性分化なのかさえわからないはずです。

そこで生物学者たちが「性別」(セックス)をどう定義しているかを調べると、ほぼ次のような共通見解があるようです。それは、卵(卵子)をつくる個体をメス、精子をつくる個体をオスと呼ぶ、というものです。「有性生殖」という活動への関わり方の違いが、メスとオスを区別する基準とされているのです。これを「肉体上の性別」の基準とするならば、性分化とは、一つの受精卵が、卵巣や子宮を発達させて妊娠・出産の機能をもつ肉体になるか、それとも精巣を発達させてメスを妊娠させられる機能をもつ肉体になるかという二者択一のプロセスを指すことになるでしょう。

もう少し詳しく言えば、それは以下のようなプロセスです。卵の中に精子が入り込むと、受精という現象が起こります。受精した卵はすぐに細胞分裂を始め(この段階の細胞塊を「胚」と呼びます)、その際にゲノム(遺伝子の全セット)を含む染色体が減数分裂という複雑なメカニズムを経ながら、それぞれの細胞の中に複製されていきます。

この胚をメス型にするかオス型にするかというレシピは、受精卵ができる段階ですでに遺伝子に書き込まれています。ヒトの全遺伝子を包含する染色体という組織は23個のペア(つまり46本)をなしており、このうち22ペアは男女

共通ですが、1組だけ男女で異なるパターンをなすペアがあり、それが「性染色体」と呼ばれています。そのパターンは女性ならX染色体が2つでXX、男性ならX染色体とY染色体が1つずつでXYというのが標準型です。男性だけがY染色体をもっていることからうかがえるように、このY染色体の中に胚の男性化を促す主要な遺伝子があると考えられています。

とはいえ、この遺伝子のスイッチが入るのは受精後約8週間経った頃なので、それまでの胚や胎児をじっくり観察しても（性染色体そのものを調べない限り）、男女の形態的な違いは見つかりません。発生の初期においては、ヒトの「肉体」（まだ人体らしいカタチにはなりきっていないわけですが）には性差はないのです。性分化を司る遺伝子のスイッチが入り、肉体の男性化を促す各種ホルモンの分泌が始まると、その効果によって、後に精巣（睪丸）やペニスになる器官が発達しはじめ、そうでなければ、卵巣や子宮、またヴァギナになる器官が発達しはじめます（このことから「ヒトの基本形は女性だ」といった言い方をする人もいますが、筆者としては、どちらかを基本形、どちらかを派生形として意味づけることがとくに有意義とは思えません）。もちろんこのことは肉体のつくり全体にも作用し、骨格や筋肉の性差、さらに今日では、脳の構造や機能にも一定の影響を与えると考えられています。

## インターセックス／性分化疾患

しかし、純粹に肉体のつくりという観点から見ると、性分化によってすべての人間がデジタルに「100パーセントの女性」「100パーセントの男性」という両極に振り分けられるわけではありません。それらはいわば観念的な理想型であって、実際に生まれる人々の肉体のあり方は一人ひとり違います。性分化を駆動する各種ホルモンの働きはきわめて複雑・精妙で、さらに母胎の側の働き方も絡み、多様な個体差をもたらすのです。思春期に、自分の性器の形や大きさ、また月経や精通の早い遅いを他人と比べて不安を抱いた経験のある読者も少なくないと思いますが、実際に違いはあるのです。

ただし、それでもほとんどの人は、フツウの女性・男性として世間に受け入れられる許容範囲内に収まります。男子中高生によくあるように、自分のペニスが他人より小さいのではないかと悩んでも、たいていそれは平均値と比べて



いくらか小さいかもしれないという程度の話にすぎません。けれども、男性なのか女性なのかということ自体が問われるほど大きく逸脱した肉体の持ち主も、少数ながら生まれてきます。そうした肉体の状態、またはその持ち主は「インターセックス」と呼ばれてきました（かつては「半陰陽」や「間性」と訳されてきましたが、現在ではカタカナ語のまま使われることが多くなっています）。また近年、この言葉のあいまいさを避け、性分化上のトラブルを要因とする肉体の状態であるということを明確に示すため、「性分化疾患」または「性分化異常症」（DSD: Disorder of Sex Development の和訳）と呼ばれることが増えています。ここで「あいまい」と言ったのは、インターセックスという言葉が誤解され、ジェンダー・アイデンティティにおける中間性、つまり「自分は男でも女でもない」という自己認識としてとらえられることがあるからです。確かにそういうケースもありますが、性分化異常があっても男性あるいは女性としてのアイデンティティをもつ人の割合の方が多いというのが実情のようです。

性分化疾患は「染色体、性腺、または解剖学的性が非定型である先天的状態」と定義されています（日本小児内分泌学会）。「非定型」という文言からもうかがえるように、インターセックス／性分化疾患とは、積極的にこういう状態であると指し示せるようなものではありません。典型的な女性型または男性型を基準として前提し、そこから逸脱した状態をすべてひっくるめてそのように呼ぶしかないわけで、したがって一人ひとりの肉体的状態はさまざまです。当事者および支援者の団体「日本インターセックス・イニシアティヴ」のウェブサイトには、クリトリスの肥大化、外見上の性別が性染色体上の性別とは逆、尿道がペニスの先端ではなくて下側にある、外見が女性型だが膣を持たない、性腺が睪丸もしくは卵巣に分化していない（もしくは両方を含む）……といった具体例が挙げられています。

最近では、六花チヨのマンガ『IS』やそのテレビドラマ版などによって、インターセックス／性分化疾患について以前よりは広く知られるようになったようです。けれども、そんな人がいることさえ知らなかったという人の方がまだまだ多いのではないのでしょうか。

## ◆ 著者紹介

かとうしゅういち

加藤 秀一

1963年生まれ。東京大学大学院社会学研究科 A コース博士課程単位取得退学。現在、明治学院大学社会学部教授。

主著 『性現象論——差異とセクシュアリティの社会学』勁草書房、1998年。『〈恋愛結婚〉は何をもたらしたか——性道德と優生思想の百年間』ちくま新書、2004年。『ジェンダー入門』朝日新聞社、2006年。『〈個〉からはじめる生命論』NHK ブックス、2007年。『フェミニズム・コレクションⅠ・Ⅱ・Ⅲ』（共編著）勁草書房、1993年。『図解雑学 ジェンダー』（共著）ナツメ社、2005年。『「ジェンダー」の危機を超える！——徹底討論！ バックラッシュ』（共編著）青弓社ライブラリー、2006年。『テクノソサエティの現在（1）遺伝子技術の社会学』（共編著）文化書房博文社、2007年。『生——生存・生き方・生命（自由への問い 第8巻）』（共編著）岩波書店、2010年。『概念分析の社会学2——実践の社会的論理』（共著）ナカニシヤ出版、2016年。『若者の性』白書——第8回 青少年の性行動全国調査報告』（共著）小学館、2019年。『若者の性の現在地——青少年の性行動全国調査と複合的アプローチから考える』（共編著）勁草書房、2022年。



有斐閣 ストゥディア

YUHIKAKU

## はじめてのジェンダー論

### *Introduction to Gender and Sexuality Studies*

2017年4月25日 初版第1刷発行

2022年4月20日 初版第12刷発行

|     |    |    |     |    |
|-----|----|----|-----|----|
| 著者  | か  | とう | しゅう | いち |
|     | 加  | 藤  | 秀   | 一  |
| 発行者 | 江  | 草  | 貞   | 治  |
| 発行所 | 株式 | 有  | 斐   | 閣  |
|     | 会社 |    |     |    |

郵便番号 101-0051

東京都千代田区神田神保町 2-17

<http://www.yuhikaku.co.jp/>

印刷・株式会社理想社／製本・複製本印刷株式会社

© 2017, Shuichi Kato. Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

★定価はカバーに表示してあります。

ISBN 978-4-641-15039-3



本書の無断複写（コピー）は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に（一社）出版者著作権管理機構（電話03-5244-5088, FAX03-5244-5089, e-mail: info@jcopy.or.jp）の許諾を得てください。